実践報告

Kyoto iUPにおけるチューターによる就学支援（I）

―予備教育課程におけるオフィスアワー（ホームルーム）活動―

岡田　幸典 *#、佐々木　幸喜 **

要　旨

京都大学の学部留学生プログラム Kyoto iUP において、2019 年度から 2021 年度に行った予備教育生に対するチューターによる就学支援、とりわけ多対多で行ったオフィスアワーに関する報告を行う。オンラインでの活動となった 2020 年度は、チューターの連携が困難になった。予備教育生に行った事後アンケートでもそれに起因する改善点の指摘があり、チューターからも「事前にチューターの交流があったほうがうまく連携できた」という声があがった。そこで、翌 2021 年度は、①活動開始前にチューターだけの交流会を行い、②毎週、チューターによるミーティングを行って次回の活動内容を決め、③準備してから活動に臨む運営サイクルを構築した。2021 年度では、根本的な改善を求める声はなく、運営サイクルによりチューターが主体となって企画・実施することができた。また、チューターに対するアンケート結果から、「常識的なことでもわかりやすく教える力がついた」などチューターにも一定の教育効果が確認された。

【キーワード】Kyoto iUP、予備教育課程、学部留学生、チューター、就学支援

1.　はじめに

京都大学（以下、本学または京大）の学部留学生プログラム Kyoto University International Undergraduate Program（以下、Kyoto iUP）では、2018 年 4 月に留学生（以下、iUP 生）の受け入れを開始し、2022 年 10 月に第 5 期生を迎えるに至った。本稿では、2019 ～ 2021 年度における学部入学前の半年間に実施した予備教育課程に在籍する iUP 生（以下、予備教育生）に対するチューターによる就学支援、とりわけ多対多で行ったオフィスアワー（以下、OH）に関する報告を行い、併せて今後の展望も述べる。

1.1　Kyoto iUP の概要

Kyoto iUP は、予備教育課程 0.5 年と学士課程 4 年の計 4.5 年からなる学部留学生プログラムで

* 京都大学国際高等教育院吉田カレッジオフィス
** 京都大学国際高等教育院吉田カレッジオフィス、（兼）同附属日本語・日本文化教育センター
\# 責任著者

ある。海外の最優秀層の学生を幅広く受け入れるために、出願および選抜時点では、高い学力と英語力を要求する代わりに日本語能力を全く問わないのが本プログラムの特徴の一つである。しかし、学士課程における学部専門教育の教授言語は日本語であるため、それに対応できるよう徹底した日本語教育を実施している。図１に、Kyoto iUP の教育課程を示す。大きく分けるとプレ予備教育、予備教育課程、学士課程の３つからなる。各課程の詳細は、佐々木･河合（2019）や佐々木（2022）に譲ることとする。

本稿で報告する就学支援は、予備教育課程のものである。予備教育課程は、学部入学前年の 10 月から翌年３月まで本学にて実施される。図２に本予備教育課程の概要を示す。10 月から翌年２月まで、日本語・日本文化教育と専門基礎教育が行われる。専門基礎教育とは、理系では、数学、物理、化学が、文系では、政治経済、世界史が英語によりそれぞれ開講され、学士課程において前提となる知識や概念の確認と習得を目的とするものである。１週間あたりの授業数は、志望学部や日本語のレベルにより異なるが７～ 16 コマ（日本語：７～ 10、専門基礎：０～６）である。１～２月に日本語および専門基礎科目の到達度確認試験を行い、一定以上の基準に達すると本課程の修了が認められる。また、同時期に志望する学部による試験も行われ、この試験に合格し、かつ、本課程を修了すると翌年度の学士課程への入学が許可される。

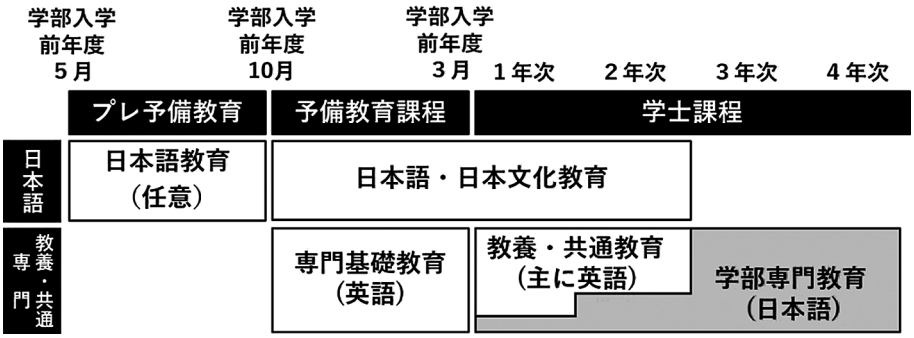

図１　Kyoto iUP における教育課程
佐々木・河合（2019）、佐々木（2022）を参考に稿者作成。

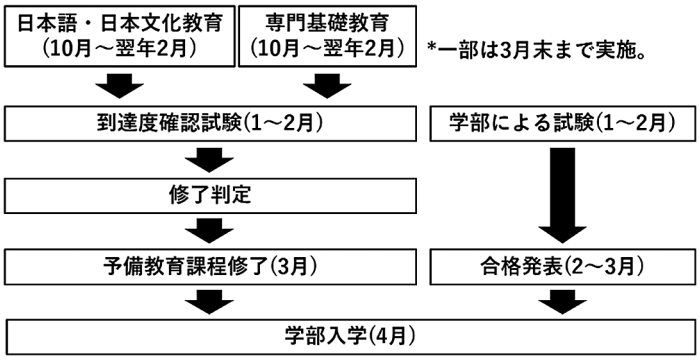

図２　Kyoto iUP における予備教育課程
Kyoto iUP 公式ウェブサイトを基に稿者作成。

2.　チューターによる就学支援

2.1　就学支援の意義

チューター制度の意義について、横田・白土（2004）は１対１で留学生の修学・生活支援をする先輩学生をつける制度であると述べている。また､｢就学[(1)]」という言葉を国語辞典で引くと「①教師に就いて学問を修めること。②学校に入って学童生徒となること。③「出入国管理及び難民認定法」に定める外国人の在留資格の一種。」（新村 出 編、『広辞苑･第六版』（岩波書店）より抜粋）とある。これら３つの中で、Kyoto iUP で用いられている「就学」の意味に最も近いのは②である。次に、チューターの具体的な役割について、前述の横田・白土（2004）は授業、実験、研究の勉学支援や指導といった主に学部留学生を前提にしたものを挙げている。その詳細と分類は本稿の後編にあたる佐々木・立田・岡田（2023）で述べるが、これらの支援は本予備教育生が対象にならないものも含まれる。そこで、どのような支援を行うかを明確にするために Kyoto iUP の就学支援担当教員である稿者らは、チューターによる就学支援の方針を以下のように定めた。

Kyoto iUP におけるチューターによる就学支援の方針

〈勉学に関すること〉

① 予備教育課程での学習内容やそれに関連することがらがより理解できるように支援を行う。

〈学生生活に関すること〉

② 予備教育課程の勉学に集中できるように、１日でもはやく日本・京都・本学での生活に慣れるための支援を行う。

③ 学士課程入学後、予備教育生の生活から学部生の生活へと円滑に移行できる準備をする。

〈チューターに関すること〉

④ 同年代、同じ学生という立場からチューターにしかできない支援を行う。

上記方針②～④について補足する。

②に関して、予備教育生の多くが初めての一人暮らし[(2)]で、かつ、文化や習慣が異なり、母語や英語が公用語でない国[(3)]で生活するため、多くの困難に直面すると予想されるからである。

③に関して、予備教育課程では前述の授業数からもわかるとおり勉学一辺倒にならざるを得ないが、学士課程では、勉学に加えて課外活動なども加わる。日本人学生や国費留学生のような他のプログラムの留学生とも接点がほとんどない予備教育生には、課外活動などのキャンパスライフに関する情報を得るのは難しいからである。本方針は、予備教育生に対する特有のものである。

④に関して、チューターによる支援の意義は、同じ年代・同じ学生という立場でしかできない支援を期待することにある。

上記の方針に基づき、次の３つの活動を行うことにした。

Kyoto iUP におけるチューターによる就学支援の主な活動内容

（a）オフィスアワー（OH）

（b）学習支援（日本語特訓、日本語授業補助など）

（c）生活支援

各活動内容について、概要を説明する。活動名の右にある丸数字は、各活動が前述の方針①～④のどれに対応するかを表す。

(a) オフィスアワー（OH）（方針①②③④に対応）

本就学支援の中核をなすのがこの OH である。予備教育課程の授業期間中である 10 月から 1 月までの毎週 1 コマ実施するチューターと予備教育生が一同に会して行う多対多の活動である。チューターと予備教育生が主体的に活動をし、教員はあくまでも補助的な役割に徹する。活動内容は、主にチューターが企画し、予備教育生の役に立つものであれば何でもよいとした[(4)]。使用言語は、活動内容により日本語もしくは英語を適宜選択する。

(b) 学習支援（日本語特訓・日本語授業補助など）（方針①④に対応）

日本語特訓は、主に授業時間数が比較的少ない[(5)]日本語上級レベルや文系学部志望の予備教育生を対象に志望する専門分野の入門書や新聞をチューターと共に講読することでさらなる日本語能力を強化するものである。また、日本語授業補助とは、予備教育生専用の日本語クラスにおいて、チューターが会話の練習相手となって、予備教育生の会話力の向上を目指すものである。これらの詳細は、別稿を設けて報告する。日本語特訓の期間は、予備教育課程の 10 月から翌年 2 月まで、日本語授業補助の期間は、授業期間である 10 月から 1 月までである。この他に、専門基礎科目に関する学習支援は学習の進展状況や予備教育生の希望状況をみて実施する。

(c) 生活支援（方針②③④に対応）

区役所や銀行での手続きに同行し、携帯電話会社の料金プランを比較し、契約を補助するといった日常生活を円滑に送るための支援である。予備教育生の求めに応じて随時実施する。

横田･白土（2004）が指摘するチューターの役割からもわかるように上記の（b）学習支援や（c）生活支援はよくある支援であり、これらに関する報告は枚挙に暇がない（小林（2007）、大塚（2010）、濱田・根本・山﨑（2012）、阿部・太田（2017））。小林（2007）は、チューターと留学生に行ったアンケート結果および先行研究からより効果的なチューター制度のあり方を提言している。大塚（2010）は、チューター制度の改善後の状況を活動報告書などから分析し、今後の対応策を提言している。濱田ら（2012）は、試験的に導入したチューター制度の効果を検証し、SNS の活用などを提言している。阿部・太田（2017）は、留学生へのインタビューを行い、チューターだけでなくクラスメートからも留学生に話しかけ、外出に誘うといった環境が必要と述べている。これらの報告では、1 対 1 のチューター制度に関するものである。それに比べて、多対多に関する報告は非常に少ないが、仁科・安原（2009）と岡部（2018）がある[(6)]。仁科・安原（2009）では、約 10 日間のサマープログラム中の多対多の活動を通してチューターが学んだことを調査･考察している。一方で、岡部（2018）は、グループで学祭への出店を企画するなどの記述があるものの活動の詳細には触れられておらず、チューターの学びを分析・考察している。そこで、本稿では定期的かつ一定期間継続して行われ、20 ～ 30 人規模で行われる OH に焦点をあてて報告を行う。

2.2　年間スケジュール

チューターの標準的な年間スケジュールを図 3 に示す。予備教育生の主なスケジュールも併記した。毎年 7 月に本学の学部生および大学院生（含む留学生）を対象にチューターの募集を行う。8 月に書類選考と面接を行って採用者を決定する。9 月下旬、採用者に業務内容や事務手続きに関する業務説明会を行い、チューター活動を開始する。最初の活動は、予備教育生との顔合わせ・自己紹介を目的としたチューターセッションである。予備教育課程が始まる 10 月から前述の就学支援を行う。翌年 3 月、日本語のさらなる強化を目的とした春期講習の授業補助を以て、当該年度の活動が終了する。

2.3　各年度の概要

表１に各年度におけるチューターと予備教育生の人数を、表２にチューターの構成を示す。どの年度もバランスのとれた構成（文理、学部生と院生）となった[7]。

各支援へのチューターの割り当てについては次の通りである。中核となるOHには、ほぼ全員で臨むこととした。

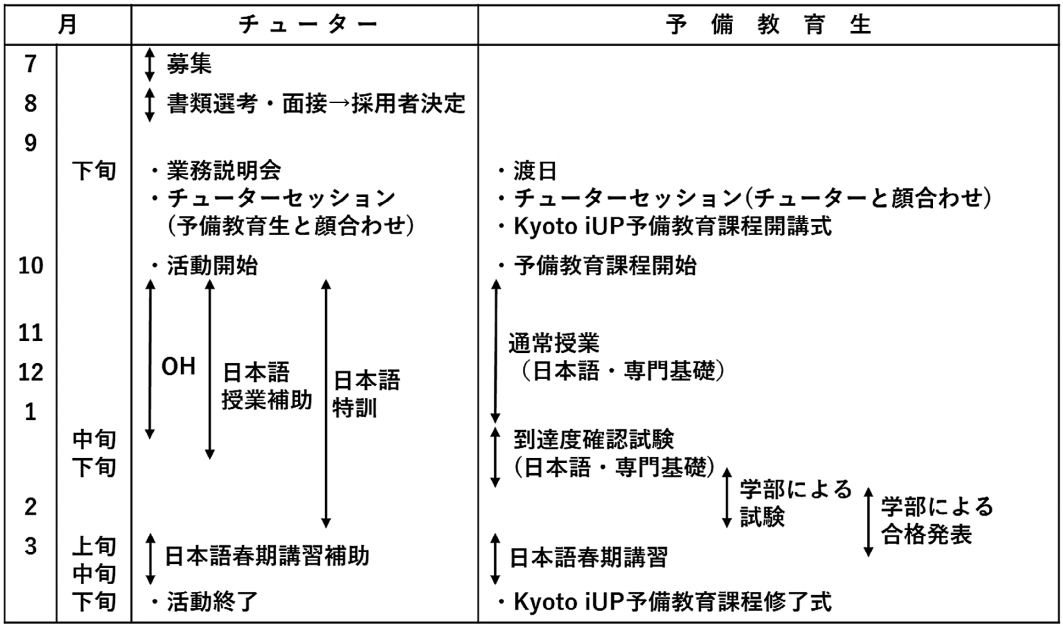

図３　チューターおよび予備教育生の標準的なスケジュール

表１　各年度におけるチューターと予備教育生の人数

年　度	2019	2020	2021
チューター（人）	18	18	16
予備教育生（人）	15（2, 13）	15（6, 9）	17（6, 11）

注　予備教育生の（　）内の数字は、文系と理系の内訳を示す。

表２　各年度におけるチューターの構成

年度	学部生		大学院生		合計
	文系	理系	文系	理系	
2019	3（0）	12（3）	2（1）	1（0）	18（4）
2020	5（0）	11（3）	2（2）	0（0）	18（5）
2021	6（0）	5（2）	4（0）	1（0）	16（2）

注　（　）内の数字は、各構成の内、留学生の人数を示す。

各支援に対するチューターの割り当て

・オフィスアワー（OH）
　→チューター自身の授業等で都合のつかないチューター以外の全員[8]。
・学習支援（日本語特訓・日本語授業補助）
　→実施時限に勤務可能なチューターの中から受講する予備教育生の志望学部・分野を考慮して、Kyoto iUP 日本語担当教員が選定。
・生活支援
　→予備教育生が希望した時間に都合がつくチューターに依頼。

2019 ～ 2021 年度の 3 年間は、コロナ禍（COVID-19）により年度ごとに活動スタイルが異なったものになった。「コロナ前」の 2019 年度は、すべての予備教育生が予定通り 9 月に渡日し、就学支援もすべて対面で行った。しかし、コロナ禍が始まった 2020 年度は、渡日が 10 ～ 12 月にずれこみ、オンラインでの活動を余儀なくされた。翌 2021 年度は、留学生[9]へのビザ発給が大幅に遅れ、渡日は学部入学の直前・直後の 2022 年 3 ～ 4 月となった。選抜の時点で日本に住んでいた予備教育生に対する支援を除いて、前年と同じくオンラインでの活動となった。次項では、毎年度異なる環境下で OH をどのように実施・運営してきたかを報告する。

3.　OH 実施状況

3.1　2019 年度

3.1.1　概要

コロナ前の 2019 年度は、全 12 回（10 月～翌年 1 月）をすべて対面により実施した。各回の活動内容を表 3 の 2019 年度の欄に示す。全員で活動した「日本語で自己紹介」（第 3 回）と「日本語でスピーチ」（第 12 回）以外は、予備教育生とチューター合わせて 5 ～ 6 人からなるグループに分かれて活動した。

開始当初の 1、2 回目は、予備教育生とチューター、さらにチューターどうしも初対面のため、うまくコミュニケーションがとれないことが多かったが、第 3 回の「日本語で自己紹介」で、チューターが場を盛り上げる質問をしたことで両者の距離が縮まり、以降はうまくコミュニケーションをとることができた。

本年度の予備教育生は、学部入学後にクラスやクラブ・サークルで日本人学生と仲良くなりたいという動機から日常会話の上達を希望する者が多かったため、日本語の会話練習（主に学生どうしがする雑談）に多くの時間が充てられた。それ以外では、日本文化の体験を目的とした「カルタ大会」（第 8、9 回）、日本での生活に関する情報提供を目的とした「病気や病院に関する日本語講座・ロールプレイングによる問診票の記入体験」（第 10 回）、学部生活に関する知識の提供を目的とした「京大用語講座」[10]（第 11 回）を行った。一方で、授業でわからないところをチューターに質問した予備教育生は少なく、対応に長時間を要する質問もなかった[11]。

企画と準備に関して、「病院で使う日本語」（第 10 回）は教員が発案したが、それ以外はチューターからの発案、もしくはチューターと教員が議論して決めたものであり、準備も主にチューターが行った。

表3　各年度における OH の活動内容一覧

回	2019 年度	2020 年度	2021 年度
1	顔合わせ、生活相談会	顔合わせ	自己紹介ゲーム I （Two truth and a lie）#4
2	文理別グループ相談会	日本語会話練習 I	自己紹介ゲーム II
3	日本語で自己紹介	日本語で自己紹介	おしゃべり会
4	質問カード #1	隔離生活 Q&A	自己紹介ゲーム III
5	日本語会話練習 I	日本語会話練習 II 日本語を使ったゲーム I	京大用語と京大生の日常生活
6	日本語会話練習 II	きずな #3 と留学生相談室の紹介	京大生の食事事情（レストラン）
7	日本語会話練習 III	日本語を使ったゲーム II 生活相談	京大生の買い物事情（スーパー、コンビニ、ドラッグストア）
8	日本文化体験 I（カルタ・練習）	ハイブリッド型 OH	京都の名所と地名
9	日本文化体験 II（カルタ大会）	先輩 iUP 生と懇談 I	日本・京都の交通事情（バスの乗り方、切符の種類）
10	病院で使う日本語	京都の難読地名と京大用語 生活相談	京大クイズ
11	京大用語、10 秒チャレンジ #2	先輩 iUP 生と懇談 II	冬の生活と冬の伝統行事
12	日本語でスピーチ （今後の抱負や OH の感想）	京大クイズ	日本語アクセント講座
13			日本人学生がよく使う言葉 （例：メモる、ドタキャン）

#1 質問が書かれたカード（例：好きな日本食は何ですか？）に対して、日本語で返答することで会話力の向上を目指すもの。返答後、チューターと質問内容をテーマにした会話を行う。
#2 上記「質問カード」と同じであるが、返答は 10 秒以内になるべく詳しく答えなければならないルールを追加したもの。NHK ラジオの英語講座で行われているものを日本語に変えて行った。会話における瞬発力の向上が期待される。
#3 きずなとは、本学にある留学生用ラウンジのことである。チューターが配置され、日本語学習の相談などができる。また、相談員による相談も受け付けている。
#4 自己紹介のクイズ。3 つの自己紹介（例：私は犬を飼っています）のうち 1 つは嘘の自己紹介をして、他の人はどの自己紹介が嘘かを当てるゲーム。

3.1.2　運営上のポイント

本年度のポイントは、(a) 連絡ノート、(b) チューターミーティング、(c) チューター提案による企画の 3 点である。

(a) 連絡ノート

連絡ノートとは、OH での予備教育生の様子を担当したチューターが記録したノートである [12]。担当教員である稿者らが詳しい様子を把握するためのもの [13] で、予備教育生ごとにノートを 1 冊用意し、OH 終了後に担当チューターに記入してもらった。記入例を図 4 に示す。

このノートは稿者らが必ず目を通し、チューターの報告に対してコメントを記入した。この目的は、教員が必ず目を通していることをチューターに知ってもらい、記入に対するモチベーションの向上を狙ったものである。同様のことを行った伊藤（2007）では、その目的をチューターの指導・育成と活動の充実化と述べている。このノートにより、教職員が把握していない様子や意外な一面も把握することができた。次年度以降、オンラインで報告する形式に変わったが、現在も続けられている。

(b) チューターミーティング

概要で述べたように、最初の 1、2 回は、活動内容を事前に決めていなかったため、何をするの

10月10日（担当○○）
野菜等を買いに行く場所を聞かれたので、スーパー○○を紹介した。
○○は月・火・木・金の夕方は5%引きになる。
チューターさんしかわからない情報です。
ありがとうございます。

11月28日（担当○○）
エクスカーションのときも感じたが、自分から積極的に日本語で話していた。他のiUP生とも日本語で話そうと努めている。目上の人と話すときと友人と話すときの話し方を使いわけができていると思う。
彼は日本語をはじめてまだ数ヶ月ですが、学習の進展が速いですね。

図４　連絡ノート記入例
原本を基に稿者が一部改変して再現。ゴシック体：チューター記入、明朝斜体：教員記入。

かを決めるだけで時間が費やされることも見受けられた。そこで、OH 終了後にチューターと教職員で短時間のミーティングを行い、次回のテーマを決めることとした。このチューターミーティングは、チューターが互いを知るきっかけとなったようである。その後、コミュニケーションアプリ上でチューターのグループチャットが作成されるなどの動きも見られ、以降、チューターどうしの連携がスムーズになった。

（c）チューター提案による企画

チューターの連携がスムーズになり始めた 11 月初旬、チューターから Lunch Gathering とエクスカーションが追加のイベントとして提案され、チューターが企画から実施までを行った。Lunch Gathering とは、お昼休みに予備教育生とチューターが集まり、日本語会話の練習を行うもので、1 月まで週 1 回のペースで実施された。エクスカーションは、大学祭の後片付け日（授業休止日）に、日本文化体験を目的として東福寺に行ったものである（予備教育生 10 名とチューター 8 名が参加した）。

3.1.3　2019 年度を振り返って

（a）予備教育生とチューターの感想

最終回の OH では、予備教育生が日本語でスピーチ行い、チューターは予備教育生へエールを送った。その席上、予備教育生とチューターが語った OH の感想は以下の通りである。

2019 年度・OH の感想（稿者が発言を要約）

〈予備教育生〉
・エクスカーションで東福寺に行ったのが楽しかった。（多数）
・チューターが悩みをきいてくれてよかった。
・カルタが楽しかった。
・予備教育期間中、日本での生活は楽しいものばかりだった。

〈チューター〉
・OH でみんなと話せるのが楽しみだった。
・3 ヶ月でみなさんの日本語がすごく上達した。
・みんなから元気がもらえたし、自身も日本語の勉強にもなった（日本人チューター）。
・エクスカーションで東福寺に一緒に行ったのが楽しかった。
・チューターのレベルが、自分の周りの学部生よりも高かった。

(b) 成果と課題

本年度の成果を予備教育生および教職員の視点に分けて述べる。上記感想からもわかるとおり、学習中心の生活を送っている予備教育生にとって、同年代のチューターと交流することでOHを息抜きの場にすることができた。また、チューターに日常生活や悩みを相談することで、解決もしくは悩みの軽減ができた。一方、教職員にとって、チューターを通して教職員が知らなかった予備教育生の意外な一面や日本語学習の成長過程を把握することができた。

当初設けた「Kyoto iUPにおけるチューターによる就学支援の方針」に沿った活動ができたかを振り返る。

①勉学に関すること　日本語会話の練習を重点的に行ったことで、予備教育生の会話力の向上に寄与し必要な支援を行うことができた。一方、専門基礎科目に関する質問がほとんどなかったのは注(11)で述べたとおりで、他の予備教育生に質問することで解決ができており、チューターに質問をする必要性がほとんどなかったからだと思われる。

②③学生生活に関すること　OHでの企画や生活相談を通して情報提供を行うことができた。

④チューターに関すること　学生どうしの会話練習やチューターから提案のあったエクスカーションやLunch Gatheringは、学生ならではのものであった。特にエクスカーションは高い満足度を得ており、方針に沿った活動ができた。

以上から、予備教育生のニーズの有無により強弱はあったが、**方針①〜④**に沿った支援ができた。2020年度以降、2019年度と同じ方向性で活動をすれば、方針に沿ったOHにできると考えられた。

今後の課題として2点あげる。1つ目は、チューターの連携である。OH開始当初、連携がスムーズにいかなかったが、その後うまくいき、チューターから企画が提案されるまでになったことから原因は互いをよく知らなかったからだと考えられる。早い段階で互いを知る機会を設ける必要がある。2つ目は、多対多のOHを運営するためのノウハウの確立である。30人規模で行うOHは、その人数の多さ故に運営が非常に難しい。チューターに関しては1つ目の課題にも関係するが、人数が多いと「他のチューターがやってくれる」という消極的な姿勢になりやすい。このことは、仁科・安原（2009）のチューターに対するアンケート結果にも記述がある。こういった者が増えるとチューターによる「主体的な活動」ができなくなる。大人数でも積極的に活動できるような環境を構築する必要がある。予備教育生に関しては、人数が多いとニーズがばらけやすくなり、全体的に満足度が低下する可能性がある。幸い本年度は、多くの予備教育生が会話練習を希望したのでニーズがばらけなかったが、今後もそうなるとは限らない。ニーズがばらけることは避けられないとしても、予備教育生が「役に立った」、「楽しかった」と思える企画を蓄積する必要がある。

3.2　2020年度

3.2.1　概要

2020年1月から始まった新型コロナ（COVID-19）の流行により、ビザの発給が遅れ、渡日が予備教育課程開始後の10〜12月にずれ込んだ（すでに日本に居住をしていた数名を除く）。また、感染防止の観点から一部を除き原則オンラインで支援を行うこととなり、大きな制約を受けることとなった。OHもオンラインでの活動となり、対面でしかできない生活支援は一切行うことができなかった。

本年度からKyoto iUPの開講式の後に予備教育生とチューターが顔合わせを行うチューターセッション（詳細は後述）を行うこととなった。これを皮切りにOHと学習支援を開始した。

OHの活動は、2019年度と同様に多くがグループごとに分かれて行った。1回のOHで、2回の

グループセッションを設けた。活動内容を表3の2020年度の欄に示す。新しい企画として「隔離生活Q&A」（第4回）、「きずなと留学生相談室の紹介」（第6回）、「先輩iUP生と懇談」（第9・11回）、「日本語を使ったゲーム」（第5・7回）、「京大クイズ」（第12回）を行った。加えて、日本入国時の隔離期間には特別OH（詳細は後述）を数回実施した。「隔離生活Q&A」は、当時日本に入国してから14日間はホテルで隔離しなければならなかった[(14)]が、これから渡日する予備教育生が抱く不安を軽減するため、一番最初に渡日をした予備教育生2名の隔離期間中に、渡日の準備や隔離生活について語ってもらった。「日本語を使ったゲーム」は、しりとりやクロスワードパズルなどいくつか試してみた。多くのゲームでは日本語能力の差がネックとなり盛り上がりに欠けたが、しりとりは日本語のレベルに関係なく大変盛り上がった[(15)]。また、ほとんどの予備教育生が渡日した12月に「ハイブリッド型OH」（第8回）として、予備教育生、Kyoto iUPの教職員とチューターが対面で再度、顔合わせを行った。未渡日の予備教育生および一部のチューターはオンラインからの参加となった。

企画は、2019年度と比較して教員による提案のものが多くなった。詳細は振り返りで述べるが、慣れないオンライン活動が影響を及ぼしたと思われる。

3.2.2　OH運営上のポイント

本年度のポイントは、（a）チューターセッション、（b）自己紹介カード、（c）特別OHの3点である。

（a）チューターセッション

チューターと予備教育生が自己紹介をして互いを知り[(16)]、チューター制度とはどのようなものかを予備教育生に周知する場としてチューターセッションを予備教育開始直前に設けた。2019年度以前は、チューターもKyoto iUPの開講式に参加して自己紹介を行っていたが、予備教育生とチューターの増加に伴い式典の時間が長くなったことや開講式のようなフォーマルな雰囲気よりもカジュアルな雰囲気で実施した方が打ち解けやすくなるとして別途セッションを設けた。これは、2019年度の序盤に互いをよく知らないことからOHの活動がスムーズに行えなかったことへの改善策でもあった。

（b）自己紹介カード

なるべく早く互いを知ることの2つ目の策がこの自己紹介カードである。自己紹介を書いたカードをチューターおよび予備教育生に作成してもらい、冊子としてチューターセッションで配布した。図5に例を示す。チューターは英語で、予備教育生は日本語学習のためにも日本語で記入して貰った。自己紹介カードを用いた事例は、チューターを周知する目的で作成・掲示した小林（2012）の報告がある。

（c）特別OH

隔離期間中は、人との接触が極端に制限されるため過度のストレスがかかることを危惧した稿者らは、ストレス軽減を目的に特別OHを企画した。具体的には、隔離が集中した10月下旬から11月中旬に週1回のペースで計4回、チューターと予備教育生（隔離に関係ない者も含む）がオンライン上に集まり、雑談をするというものである。目的がストレス軽減のため、使用言語は英語とした。特別OHの副次的な効果として、予備教育生どうしも知り合いになるきっかけをつくることができた。未渡日の予備教育生どうしもOH以外に交流する場がほとんどなかったからである。従来、このようなことは起こりえなかったが、オンライン授業では、日本語のクラス（レベル）が異なり、文理が異なると顔を合わす機会すらなかったのである。

(a)予備教育生

Kyoto iUP 自己紹介カード

名前	Jos Lammers
ニックネーム	Jos
学部	工学部工業化学科
自己紹介	はじめまして!〇〇出身の Jos です。ちょっと変なポイントだけど、正しい発音はヨスです。趣味はアニメを見ることや、音楽を聴いて分析することなどです。将来は、いい科学研究者になりたいです。それに、化学に関係がないことも経験したいです。京都でたくさん新しいことを教えてもらうと願います。面白そうな大学生活を、楽しみにしています!

(b)チューター

2021 Kyoto iUP Tutor

Name	京大 花子（Hana）
Faculty	Faculty of Letters (Department of Contemporary History), fourth-year student (B4)
To iUP Students	はじめまして！ Hello, everyone～ I'm Hana. I'm currently majoring in French and francophone studies, and my main focus lies on literary histories. My hobbies are: going on a short trip on foot, watching classic movies with foreign language subtitles, and cooking. I also like learning new languages to travel abroad or to read books in their original. I'm looking forward to getting to know you all, too☺ Please talk to me a lot and ask questions at any time =^_^=

図５　自己紹介カードの例

（a）予備教育生、（b）チューター。作成者に掲載の同意を得た上で、個人情報に関する部分を改変した。

3.2.3　2020 年度を振り返って

（a）アンケート

全日程を終えた後、OH の改善点や活動内容のニーズの把握を目的としたアンケートを予備教育生、チューター双方に実施した。アンケートはオンラインで行い、匿名とした。また、回答形式はすべて自由記述とした。通常、アンケートは５段階評価などの集計・分析をしやすい形式で行うことが多いが、本アンケートでは、具体的な内容を求めたために自由記述とした。設問および回答を表４（予備教育生）および表５（チューター）の「2020 年度」の欄に示す。

予備教育生の回答について、［Q1］楽しかったことや役に立ったことでは、チューターとの雑談や生活相談が最も多かった。

［Q2］やってみたかったことでは、ゲームやクイズが最多であった。ゲームやクイズは何度か行ったのでもっとしたかったという意味であろう。やはり、楽しみながら学べるものが好まれるようである。また、［Q4］OH 以外でやってほしいことからもわかるように、対面での活動や対面でしかできない活動を望む声が多かった。「オンラインでのコミュニケーションは大変」と答える回答者までいたことから、オンラインは対面よりコミュニケーションが難しく、満足感が得にくいことが確認された。ここで、注目すべき点は「専門基礎科目の勉強を教えてほしい」という回答が全くなかったことである。これは、専門基礎科目の教授言語が英語であり、言語障壁がなかったことが一因と考えられた。当初は、専門基礎科目の学習支援を方針に入れていたが、「必要に応じて」対応するという程度で現状は十分であると認識された。他の事例では、チューターによる支援を学習支援に限定したり、留学生がその支援を希望することが多いのとは対照的である。

［Q3］改善点では、「テーマを事前に決める」という声が大変多かった。10 人中５人が回答したので、改善を要する問題と認識された。また、チューターの回答（［Q4］）からも「沈黙の時間ができたので、予備教育生の日本語学習の進捗具合や OH でどのような会話練習がしたいかをチューター側が事前に把握した方がいい」とあった。沈黙の時間ができるのは、珍しいことではなく濱田・根本・山﨑（2012）でも、回を重ねるごとに何を聞きたいかわからなくなることがあり、チューターと留学生の双方が目的意識を持つ必要があると述べている。他の回答に「業務開始前に、チューターどうしで交流し、OH の活動計画を立てる時間を設ける」といった提案があり、チューター自身も連携が難しいと感じ、事前にテーマを決める必要性を感じていたようである。対面で行っていたときは、連携がで

表4　2020・2021年度OHアンケート結果概要（予備教育生）

2020年度（N = 10、回収率67%、2021年3月実施）	**2021年度（N = 8、回収率47%、2022年1月実施）**
［Q1］OHの活動の中で、楽しかったことや役に立ったことは何ですか？	
・チューターとの雑談・生活相談（5票） ・クイズやゲーム（2票） ・チューターの体験談 ・隔離生活の情報 ・日本語での会話	・クイズや自己紹介ゲーム（3票） ・日本に関するいろいろなトピック、日本で生活するときのコツ、チューターの実体験（3票） →日本に来る前にいろいろな情報を知ることができてよかったから →京都や日本文化に対して興味が持てた ・レストランの紹介（2票） ・フリートークとランダムな質問（2票） →お互いのことをよく知ることができたから ・日本人のクラスメートとの会話の進め方 ・日本語で会話をすること
［Q2］OHでやってみたかったことは何ですか？	
・ゲーム、会話が必要なゲーム（3票） ・対面での活動 →オンラインでのコミュニケーションは大変 ・みんなと食事に行く ・会話のきっかけをつくるトピックを考える ・入学後の勉強に関する情報（授業、単位） ・日本のこと ・漫画を一緒に読むこと ・特になし（2票）	・ゲームやクイズ（6票） →チーム対抗ゲームもやりたかった ・もう少しみんなと深く話したかった ・様々なトピックでみんなとディスカッション →トピックに関する異なる文化を持ったみんなの意見を学びたかった ・全員か大人数でもっと活動をしたかった ・クラスで勉強した日本語の練習
［Q3］OHをよりよくするにはどうすればいいですか？	
・テーマを事前に決める（5票） →話が続かずみんなが沈黙する場面があった →何をするかを決めるのに時間がかかった ・対面でのOH（2票） ・特になし（2票）	**〈内容に関するもの〉** ・もっとゲームやクイズをしたかった（2票） →みんなともっと仲良くなれそうだから ・フリートーク ・プレゼンの資料でもっと多くの写真・画像や例を多用したほうが理解しやすかった **〈グループセッションに関するもの〉** ・メンバーの組み合わせを変えてもっとたくさんのセッションをしたかった ・参加者が自由にグループを選択できる「フリーセッション」 →カオスになると思うが、最後には楽しい状況になりそう ・人数を5人、10人とバリエーションを増やす →様々な化学反応や経験を得られそう ・大人数のグループセッション →セッションの最後に飽きがこないと思う **〈その他〉** ・OH以外でも、チューターと予備教育生の絆を深めるような活動 ・特になし
［Q4］OHに限らず、チューターにどのようなことをしてほしいですか？	
・エクスカーション（4票） ・チューターの学生生活（勉強や日常生活）（2票） ・日本語の会話練習 ・相談にのってほしい ・ゲーム ・学部の授業で出てくる日本語 ・特になし（2票）	・1・2回生の教養科目の紹介 ・OHの外でも連絡を取り合い、ちょっとした活動をしたら楽しいと思う ・もっとリラックスして接してほしい →最初は丁寧な分、こちらが緊張してしまったが、その後、少しずつ打ち解けられたからよかった →これからも、もっともっと仲良くなれるといいなと思うし、とても素敵な体験ができた！ ・一緒にスポーツをする ・ランチミーティング ・特になし（3票） →チューターも忙しそうだから

・質問および回答の多くは英文のため、稿者が趣旨を変えずに要約・和訳した。
・1人で複数の記述があった場合は内容ごとに分類・集計を行ったので、回答の項目数が回答者の数より多い場合がある。

表5　2020・2021年度OHアンケート結果概要（チューター）

2020年度（N = 5、回収率28%、2021年3月実施）	**2021年度（N = 8、回収率50%、2022年1月実施）**
［Q1］良かったこと、やりがいを感じたこと、自身の勉強になったことや成長できたことはありますか？	
〈やりがい〉 ・予備教育生の役に立てたとき（2票） ・予備教育生の日本語が上達していくのを実感できたとき（2票） **〈成長・勉強になったこと〉** ・異文化に触れられたこと（2票） ・相手が緊張しないように心地よい空気を作るのが大変で、場をうまく廻す方法を勉強できたこと ・予備教育生のがんばっている姿を見て刺激を受けたこと	**〈やりがい〉** ・予備教育生の役に立てたとき（2票） ・日本語で話そうとしたり、日本のことを知ろうとたくさん質問してくれたとき（2票） **〈成長・勉強になったこと〉** ・異文化に触れられたこと（3票） ・自身が知らなかった日本文化を知ったこと（2票） ・自分にとって常識的なことでもかみ砕いて説明しようとする力が身についたこと（2票） ・当たり前だと思っていたことが予備教育生には新しいことだと知ったこと ・留学生と関わる機会を持てたこと ・予備教育生のがんばっている姿を見て刺激を受けたこと ・予備教育生の話を聞くことで、将来自分が海外に行った時、どのような問題が起こるのかが理解できたこと
［Q2］今回行った活動以外で、どのような活動があれば予備教育生にはいいと思いますか？	
・校外に出て、様々な場所に足を運ぶ（3票） →京都と大阪、都会と地方の違いを学ぶ →エクスカーションは距離が縮まる ・対面（2票） ・日本の学生と対面で話す →対面だと日本人はshyなので、それにめげずに仲良くなる経験を積んで自信を持たせる ・予備教育生がチューター以外の学生とも関わり合いが持てる機会を設ける	・校外に出て、様々な場所に足を運ぶ（2票） ・対面 ・サークルの新歓などに同伴してサポートをする ・予備教育生がチューター以外の学生とも関わり合いが持てる機会を設ける ・昼食を一緒に食べる。 ・各学部の雰囲気や学部特有の行事について知る機会を設ける
［Q3］OHでやってみたかったことはありますか？	
・クイズ大会や日本語でゲーム（4票） →ビブリオバトル（好きな本を1分間で紹介し、誰の本が一番読みたいかを競うゲーム） ・テーマを決めた／決めないトークタイム ・一緒に何かを作るアクティビティ	・テーマを決めた／決めないトークタイム ・大学生がよく使うスラングや京大用語 ・（予備教育生が未渡日だったので）役所での手続きなどのシミュレーション ・日本のアニメの紹介 ・学部ごとのセッション ・オンラインマップで京大周辺のバーチャルツアー
［Q4］OHの改善点	
・業務開始前に、チューター同士で交流し、OHの活動計画を立てる時間を設ける（3票） →よりスムーズにアイデアも出せ、色々トライできた ・文化体験 ・予備教育生の日本語学習の進捗具合やOHでどのような会話練習がしたいかをチューター側が事前に把握する →質問がない時や話すことが得意でない予備教育生が集まると沈黙の時間ができた	・会話形式でコミュニケーションをとりながら活動をする →スライドを使うとすべての予備教育生が理解できたか不安があり、チューターが話す部分が多くなる ・共通の趣味を持つ人同士のセッション ・このアンケートを来年度のチューターに提供して参考にしてもらう ・対面での活動 ・予備教育生にもっとニーズ調査をする

表５　続き

［Q5］感想	
・非常に貴重な経験ができたとともに、多様な人と関われてよかった。初め、分からないことだらけの予備教育生の成長していく過程に関われたこと自体にとても感謝している。 ・色々と難しい状況だったが、構内で会ったときに予備教育生に話しかけられるのがとても嬉しく、やってて良かったと感じた。チューターとして手助けが出来て、心からよかった。 ・チューター活動は、チューター自身も予備教育生から元気ややる気をもらえる、とても良い活動だと思う。機会があればなんらかの形で参加したい。 ・予備教育生が無事全員京都大学の一回生となることができ大変嬉しい。彼らに対面で会ったことがないが、コロナが落ち着いたらみんなで集まりたい。	・今回のOHの内容は、大変充実していたのではと考える。対面が叶わなかったので、また何かの機会に対面でできれば幸い。 ・毎回、当番が資料を作成していたが、それには謝金が発生せず善意での活動になるので、かなり負担が大きかったのではないか。全体としては非常に有意義で満足のいく活動だった。 ・チューターを務めたこと、予備教育生と出会えたことは、自分が成長できる良い経験になった。ありがとうございました。 ・オンラインでのOHとなり不安が大きかったが、思っていたよりも難点はなく、チューター・予備教育生ともにOHを楽しめていたように思う。 ・予備教育生との交流や他のチューターとの話を通して、新しい発見がたくさんあり、大変勉強になるとともに楽しく活動することができた。ありがとうございました。予備教育生がどれくらい興味を持ってくれたかは分からないが、OHが一週間の楽しみの一つになっていれば嬉しい。また、日本での生活が始まった際に少しでもOHでの知識が役立てばいいなと思う。

・稿者が趣旨を変えずに要約をした。
・１人で複数の記述があった場合は内容ごとに分類・集計を行ったので、回答の項目数が回答者の数より多い場合がある。

きるのに長い時間を要さなかったことを考えると、オンラインでは、活動の多くが密室状態のグループセッションで行い、OHが終わればすぐに退室するのでチューターどうしが交流する機会、例えば、OH前後にあいさつを交わし、雑談をする機会さえなく[17]、また、特別にチューターが交流する機会も設けなかったので、チューターどうしがうまく連携できるまでに時間がかかってしまった。

チューターが初期から連携できるような対策を立てる必要があると認識された。チューターのその他の回答は後述する。

（b）オンライン活動

本年度の特徴は、オンラインでの活動に尽きる。ほとんどの参加者がオンラインでこのような活動を行うのは初めてだったので、オンラインでの活動に慣れることから始めなければならなかった。対面で行った2019年度のOHとの比較や前述のアンケート結果（表４、５）からオンラインがOHに及ぼした影響を考察すると以下の通りになる。

オンラインがOHに及ぼした影響

〈長所〉

① 参加者全員がパソコンなどを使うので、資料の配布・共有が容易になった。
② インターネット上のアプリ（例：クイズアプリ）を積極的に使うようになった。

〈短所〉

③ 音声の遅延や音質が原因で、コミュニケーション（特に日本語）が難しくなった。
④ グループセッションが密室となり、他のグループの様子が把握できなくなった。
⑤ オンラインでしか会えないために、互いを知る機会が著しく低下した。
⑥ チューターどうしがスムーズに連携できるまでに時間を要した。
⑦ オンラインのホストであった教員がOHの主催者に見えてしまい、チューターと予備教育生が主体的に活動するという意識が低くなった。

上記①～③は、オンライン授業でも当てはまるものである。③のコミュニケーションの難しさは、日本語会話をテーマにした回が対面実施時の約半分になったことからもうかがい知れる。④は、対面でグループセッションを行う場合、同じ教室にいる他のグループの様子がわかるのでチューターが周囲をみながら臨機応変に対応できるが、オンラインでは完全な密室状態なので孤軍奮闘するしかなく、それがグループセッションをより難しいものにさせた。⑤と⑥は、(a) アンケートで指摘したとおりである。⑦について、メインルームに集まったときはホスト役の教員が全体を仕切っているように見えてしまい、チューターが主体的に活動するのをやりにくくさせたようである。

3.3　2021 年度

3.3.1　OH 運営上のポイント

2020 年度に指摘を受けた改善点やオンラインの短所から生じた問題点に対応するため、チューターからの提案「業務開始前に、チューターどうしで交流し、OH の活動計画を立てる時間があれば、よりスムーズにアイデアも出すことができ、色々トライできたのではないかと思う。」を採用することにした。すなわち、活動初期からチューターどうしの連携がとれ、活動内容を事前に決めて OH に臨めるシステムの構築が必要となった。そこで、稿者らは図 6 に示す運営サイクルを計画・実行することとした。

以下で図中の (a) ～ (f) を説明する。

(a) チューター交流会

活動開始前に行った業務説明会終了後、チューターの親睦と OH の方針を話し合うことを目的としたチューター交流会を行った。交流会に先だって、過年度の活動内容とアンケート結果を示し、チューターが連携し、活動内容を事前に決めることの重要性を説明し、どのように OH を企画・実施するのかという問題提起を行った。チューターが OH の方針を議論することで、チューターが主体的に活動するという意識をチューターに持たせる狙いもあった。また、この時点でチューターだけのグループチャットも作成され、以後のチューター間のコミュニケーションに役立った。

(c) チューターミーティング

(b) OH 終了後、毎回短時間で、今回のレビュー、次回の内容と当番（準備と進行役）を決める

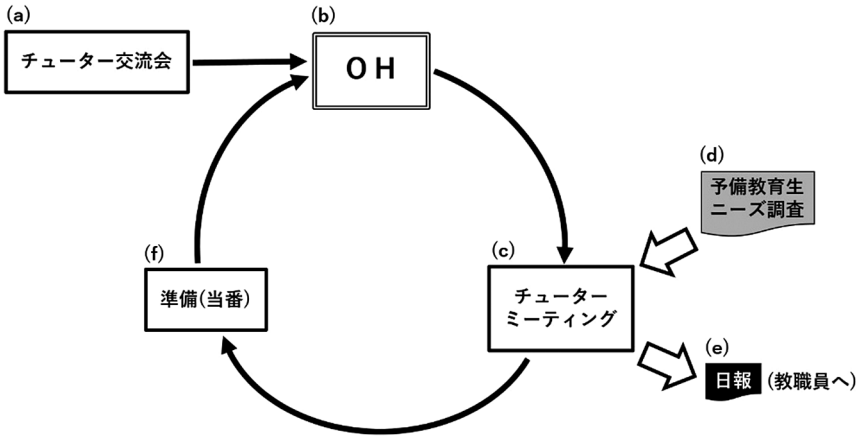

図６　OH 運営サイクル

チューターによるミーティングを行った。内容の決定には、(d) 予備教育生に行ったOHに対するニーズ調査も参考にした。ここでも教員はサポート役に徹した。また、進行役のチューターを設けたのは、OHをチューターが企画・実施していることを参加者全員が共有することを狙ったものである。

(e) 日報

OHの終了後、OHの状況や予備教育生の様子を報告する日報を各チューターに作成してもらった。2019年度の連絡ノートに相当するものである。

(f) 準備

当番となったチューターが次回のOHで使用する資料を作成した。以下、(b) → (c) →…を繰り返した。

3.3.2　概要

2021年度もビザ発給に時間を要したことで、予備教育生の渡日が2020年度よりも大幅に遅れる見通しとなりオンラインでのスタートとなった。結局、最終回までオンラインで行うことになった。前年度同様に5～6人のグループセッションを中心に活動を行った。活動内容は前述のサイクルに従い、10月の数回、チューターが予備教育生にどのようなことをしたいかというニーズ調査を行い、留学生や留学経験のあるチューターの経験も加味して決定した。活動内容を表3の2021年度の欄に示す。本年度の特徴は、活動にゲームやクイズを取り入れ参加型にしたことである。例えば、「京大生の食事事情」(第6回) では、本学周辺のレストランを紹介するというものだったが、看板メニューの価格をあてるクイズを加えることで、一方的に情報を与えるのではなく、予備教育生にも参加できる形式にした。この方式で、楽しみながら役に立つ情報を学べるようになった。

順調に進んでいたが、新型コロナ・オミクロン株の流行に伴い、2021年11月29日から外国人の新規入国が停止されることになり、渡日の目途が全くたたなくなった (朝日新聞 (2021)、NHKニュース (2021))。この状況下で、勉強へのモチベーション低下や日本での生活に慣れる前に学部での生活をスタートしなければならないことが懸念された。そこで、以降は「本学での留学生活・学部生活が楽しいことを知ってもらう」という方針も加え、チューターには本方針も考慮して活動内容を決めてもらった。

3.3.3　2021年度を振り返って

(a) アンケート

2021年度も全日程終了後に予備教育生、チューターの双方に匿名のオンラインアンケートを実施した。質問は2020年度と同じである。回答を表4 (予備教育生) および表5 (チューター) の「2021年度」の欄に示す。予備教育生の回答について、[Q1] 楽しかったことや役に立ったことでは、ゲームやクイズ、日本で生活する上での情報と答えたものが多かった。一方的に情報を与えるのではなく参加型にすることで、予備教育生の満足度をあげたのではないかと思われる。[Q2] やってみたかったことでも参加型が圧倒的な支持を集めた。一方で、日本語を除く勉強 (専門基礎科目) を教えてほしいという要望は今年度も出なかった。[Q3] 改善点について、内容に関する回答では「もっと○○がしたかった」というものが多く、本年度の活動内容がニーズから乖離していなかったことが確認できた。改善点として、グループセッションの人数や組み合わせに関することが指摘されたが、これについては次の (b) グループセッションで述べる。チューターからの指摘 (表5の [Q4]) も活動の中のスタイルやグループ分けに関することであり、根本的な改善を要すること

なく対応できることであった。［Q4］チューターに対して望むことは、具体的な企画の提案やもっと仲良くなりたい旨の回答が多くみられたことから、チューターが良い雰囲気づくりに努めた結果と言えた。

（b）グループセッション

グループセッションの適切な時間と人数に関するアンケートも予備教育生とチューターに実施した。グループセッション１回あたりの適切な時間を図７、適切な人数の組み合わせを図８にそれぞれ示す。想定した活動内容によって回答は変わるが、適切な時間は予備教育生とチューターで平均値はそれほど変わらず、１つのセッションあたり 35 ～ 40 分が適切な時間となった。一方で、適切な人数は予備教育生とチューターで結果が分かれた。予備教育生はチューター２人に対して予

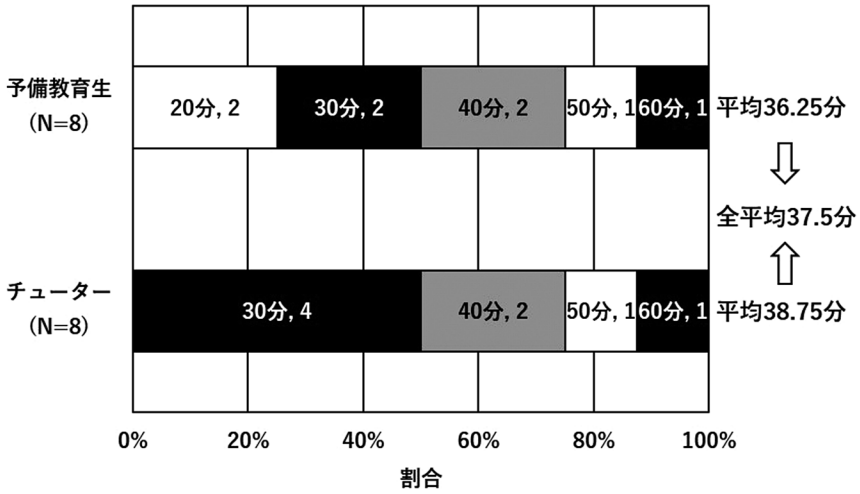

図７　グループセッションの適切な時間に関するアンケート
各要素の右の数字は回答した人数を示す。

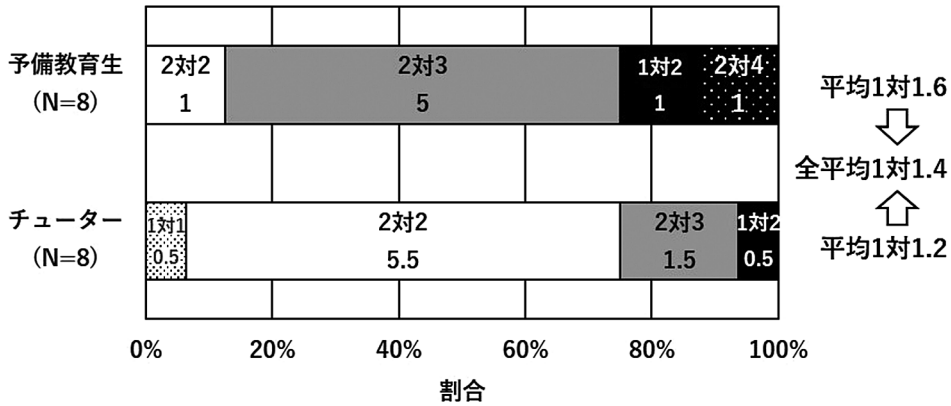

図８　グループセッションの適切な人数に関するアンケート
各要素の上段は（チューター）対（予備教育生）の組みあわせを、下段は回答した人数を示す。一人の回答者が２つの組み合わせを回答した場合は、0.5 人で計算した。平均値は、チューター１名あたりの予備教育生の人数である。

備教育生３人が最頻値だったが、チューターはチューター２人に対して予備教育生２人が最頻値となった。この結果から予備教育生は、合計５人でのセッションが最適と考えているわけだが、一方で、前述の（a）アンケートでは大人数のセッションを希望する意見も出た。同時にゲームやクイズの希望が多かったことを考慮すると大人数で行うゲームやクイズをやりたかったために改善点として指摘され、本年度の活動内容を考えると２対３が適切と考えたのではないかと推測される。一方で、活動をリードする立場のチューターは、予備教育生が少ない方が活動しやすいと考えているようである。

（c）全体

本年度はオンラインでの活動であったにも関わらず、新たに導入した運営サイクルに基づき、チューターどうしが連携し、主体的に活動したことでスムーズにOHを企画・運営できた。予備教育生に対するアンケート結果でも2020年度のような根本的な改善を求める指摘はなかったので、次年度もこの運営サイクルを継続していくべきと結論づけられた。

4.　チューターへの効果

2019年度のチューターによるOHの感想および2020年度と2021年度のチューターアンケートの結果（表５［Q1］、［Q5］）より、チューターにも学びや気づきがあった。このような報告はたくさんあり、副田（2010）や田中・椎名（2019）がそれらを分類している。今回の主な回答を副田（2010）の分類に従って整理すると次のようになる。

①異文化コミュニケーションの技術の習得

・場をうまく廻す方法を勉強できた

・常識的なことでもかみ砕いて説明しようとする力が身についた

②文化理解

・異文化に触れられた

・自身が知らなかった日本文化に触れられた

・当たり前だと思っていたことが予備教育生には新しいことだと知った

③言語への関心

・自身も日本語の勉強にもなった

④勉学への取り組み方

・予備教育生のがんばっている姿を見て刺激を受けた

この他にも「支援することにやりがいを感じた」や「自身が留学したときのシミュレーションができた」というものもあり、チューターに対しても一定の教育効果が認められた。田中（2015）が指摘する「チューター制度は双方が教える側でもあり、学ぶ側でもある」という関係を本OH活動においても築くことができた。

5.　今後の展望

予備教育生への就学支援の方針に基づいて、OHの運営を行った。OHは長期間（約３ヶ月半）かつ定期的（毎週）に実施し、活動内容を限定せず、予備教育生とチューターが各15名前後参加

する規模の大きな多対多の活動である。このような活動の報告はあまりなく、Kyoto iUP の就学支援を特徴づけるものである。1 対 1 などの少人数グループと比較して、多対多では、チューターどうしの連携が必要となり、個々人が望む活動も異なるので難しくなる。しかも、オンラインは対面と比べてより困難を伴う。本活動を通して、定期的に OH のような活動を多対多で行う場合には、①チューターが活動開始期から連携できること、②予備教育生のニーズをこまめに把握すること、③事前にテーマを決めて、チューター全員が目的や内容を把握することが肝要であるとわかった。特に①は非常に重要で、活動前にチューター交流会を実施してチューターどうしが知り合いになることで、活動初期から連携することができた。さらに、その後も②や③をチューターが自発的に行う姿勢が見られ、スムーズに活動できることがわかった。すなわち、図 6 で示した運営サイクルを構築することで、オンラインでも対面と同等か同等以上の活動をすることができ、多対多での活動についてのノウハウを得ることができた。アンケートの結果から、オンラインでのグループセッションは、時間が 35 ～ 40 分、人数がチューター 2 人に対して予備教育生は 2 ～ 3 人がちょうど良いことがわかり、今後のグループセッションのあり方の指針となった。また、予備教育生がチューターに専門基礎科目の勉強を教えてほしいという声がなかったのは興味深い。横田・白土（2004）が示したチューターの役割として、勉学のサポートが挙げられているのとは好対照である。これは、教育課程（予備教育課程と学士課程）や教授言語の違いに起因するものだと思われるが、チューター活動に関して予備教育生と学部生とでは異なる方針で臨む必要があることを示している。

今後、予備教育生とチューターの顔ぶれは毎年変わるので、運営サイクルを状況に合わせて臨機応変に改良していく必要があるだろう。また、将来、予備教育生の増加が見込まれる [(18)]。一定の規模以上になると活動形態の見直しや運営サイクルの大幅な改良が必要になるだろう。だが、ノウハウもなくゼロからやり直すわけではない。ここで得られたノウハウや経験をこれからのチューターが共有し、代々継承・発展させていけばさらに充実した OH を提供できると確信する。

謝辞

本報告の執筆を勧めて下さった国際高等教育院 Kyoto iUP プログラムマネージャー・特定教授の長谷部 伸治先生、この 3 年間に予備教育生のために多大なる支援をして下さった Kyoto iUP チューターの皆様、事務的なサポートをして下さった吉田カレッジオフィス教務掛の職員の皆様にも御礼申し上げます。最後に、細部にわたる有益な助言を下さいました査読者の先生方と本誌編集委員長・杉山 雅人先生に感謝申し上げます。

注

(1) 横田・白土（2004）では「修学」という語を用いている。意味は、「学問を修め習うこと」（新村 出編、『広辞苑・第六版』（岩波書店））である。予備教育課程は、学士課程に進学するための準備期間であり、「就学」のほうがより適切である。しかし、支援や方針の違いはあまりない。

(2) iUP 生は予備教育課程から最大 2 年間、本学の百万遍国際交流会館を住まいとすることができる。本会館が完成した 2019 年以降の予備教育生は、これまで全員が本会館で過ごしている。

(3) 日本に来るのが初めての予備教育生は「日本の街中では、想像していた以上に英語が通じない」という感想を述べることが多い。

(4) 一般に「オフィスアワー」は、授業や勉学に関することを担当教員に質問・相談することを指す。本稿の OH のような活動は、通常「ホームルーム」と称することが多い。しかし、2019 年度当時、Kyoto iUP では学部 1 回生の iUP 生と担当教職員が定期的に集まることを「ホームルーム」と呼ん

でいたため、混同を避けるために本活動をオフィスアワーと呼ぶことになった。

(5) 日本語のレベルによる授業時間数を理系の予備教育生で比較すると、上級レベルは週 13 コマ（日本語：7、専門基礎：6）に対して、ゼロ初級は週 16 コマ（日本語：10、専門基礎：6）と 3 コマ多い。また、文理の授業時間数をゼロ初級で比較すると理系は週 16 コマ（専門基礎：6、日本語：10）に対して、文系は週 10–14 コマ（専門基礎：0–4、日本語：10）と 2–6 コマ少ない。

(6) 横田・白土（2004）が、チューター制度を 1 対 1 で行うと説明していることからもわかるように、多対多の活動は大変珍しいものと言えるのではないだろうか。

(7) 理系の大学院生が少ないのは、応募者がほとんどいなかったからである。原因として、研究活動で決まった曜日・時限に勤務することが難しいことと研究室が予備教育を行う吉田キャンパス（京都市左京区）ではなく、桂キャンパス（京都市西京区）や宇治キャンパス（京都府宇治市）にあることが多いからではないかと稿者は推測する。

(8) OH の実施時限に授業があるなどで一度も OH の勤務できなかったチューターを除くと毎年度 13 ～ 15 人のチューターで活動した。

(9) Kyoto iUP の留学生は、私費留学生に分類される。

(10) 本学の学生が使う用語のことである。例えば、「NF（November Festival、11 月祭＝大学祭）」が挙げられる。日本人学生は、インターネットでこれらの言葉を知ることができるが、日本語学習歴 1 年未満の予備教育生が自力で調べるのは困難である。

(11) 授業でわからないことがある場合は、教員に質問するか、予備教育生どうしで議論することで解決していたようである。

(12) 本学で実施された別の留学生プログラム（稿者らは担当ではない）において、チューターと予備教育生の勉強会を行った際、学習内容を記録したノートを作成していたのをヒントに OH でも予備教育生の様子を記入してもらうことにした。

(13) OH は 1 つの教室で行い、教員も常駐するが、5 ～ 6 のグループに分かれて活動をするため、予備教育生全員の詳しい様子を教員が把握するのは困難である。

(14) 当時の隔離は、食事の購入のためにホテル内もしくは近隣のコンビニに行く以外は、部屋から外に出ることもできなかった。この隔離期間中も予備教育課程の授業をオンラインで受講しなければならなかった。

(15) 普通のしりとりだけでなく、名詞限定しりとりや語尾が「い」で終わるもの限定しりとりなど飽きないようにチューターが工夫を凝らした。

(16) チューターセッションに参加できなかったチューターは、事前にビデオメッセージを収録し、当日それを放映することで対応した。

(17) 30 人程度がオンライン上で集まると特定の人と雑談したり、挨拶をするといった対面では可能なことも不可能である。また、OH 後に雑談するには、オンライン上で新たな場所を設けないといけないのでハードルは高い。

(18) 2022 年度は、26 名の予備教育生を迎え、14 名のチューターで活動を開始した。

参考文献

・朝日新聞（2021）「入国停止、来日できない留学生　1 千人待ちの東大「教育環境の試練」」https://www.asahi.com/articles/ASPCY6VDQPCYUTIL030.html（最終閲覧 2023 年 1 月 6 日）

・阿部恵・太田徹（2017）「日本人チューター支援―留学生の視点から―」『八戸工業高等専門学校紀要・第 51 号』(2017), pp. 15–18

・伊藤孝惠（2007）「チューター活動と留学生相談室の支援―山梨大学の事例から―」『山梨大学留学生センター研究紀要』(2007), pp. 3–11

・NHK ニュース（2021）「オミクロン株 各国の入国制限・日本の水際対策は？広がる感染」https://www.nhk.or.jp/shutoken/newsup/20211129a.html（最終閲覧 2023 年 1 月 6 日）

・大塚薫（2010）「高知大学におけるチューター制度の現状及び課題」『高知大学総合教育センター修学・留学生支援部門紀要・第 4 号』(2010), pp. 121–138
・岡部真理子（2018）「留学生を支援する日本人チューターの学び―PAC 分析を用いたアジア圏チューターの事例から―」『都留文科大学研究紀要』(2018), pp. 297–315
・Kyoto iUP 公式ウェブサイト：https://www.iup.kyoto-u.ac.jp/（最終閲覧 2023 年 1 月 6 日）
・小林浩明（2007）「チューター制度の改善と留学生アドバイジング」『北九州市立大学国際論集』(2007), pp. 53–62
・小林浩明（2012）「留学生を「支援する」チューター制度から留学生と「学び合う」チューター制度へ」『ウェブマガジン　留学交流』（2012.4），特集 日本人学生と留学生 https://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2012/__icsFiles/afieldfile/2021/02/18/hiroakikobayashi.pdf（最終閲覧 2023 年 1 月 6 日）
・佐々木幸喜（2022）「Kyoto iUP 生を対象とした「日本語上級（文献講読 IIIA）」での実践―再話活動による使用語彙の拡充を目指して―」『京都大学国際高等教育院紀要・第 5 号』(2022), pp. 119–133
・佐々木幸喜・河合淳子（2019）「オンラインによる渡日前準備学習―留学生活への円滑な移行を目指して―」『留学生交流・指導研究』(2019), pp. 49–59
・佐々木幸喜・立田有香・岡田幸典（2023）「Kyoto iUP におけるチューターによる就学支援（II）―学士課程におけるチューターセッション―」『京都大学国際高等教育院紀要・第 6 号』(2023), pp. 93–105
・副田恵理子（2010）「チューター活動における日本人学生の学び―日本人チューターと留学生のインターアクションの分析から―」『藤女子大学紀要・第 I 部』(2010), pp. 87–102
・田中里奈・椎名渉子（2019）「留学生を対象としたチューター制度の現状と課題―フェリス女学院大学を例として―」『フェリス女学院大学文学部紀要』(2019), pp. 61–78
・田中瑠美（2015）「留学生チューター制度の導入」『帝京大学宇都宮キャンパス研究年報・人文編』(2015), pp. 123–127
・仁科浩美・安原薫（2009）「国際連携サマープログラム 2008 においてチューターは何を得たか」『山形大学紀要（工学）・第 31 巻』(2009), pp. 39–50
・濱田龍之介・根本直弥・山﨑瑞紀（2012）「留学生と日本人学生のためのチューター制度の試験的導入とその効果」『東京都市大学横浜キャンパス情報メディアジャーナル』(2012), pp. 117–121
・横田雅弘・白土悟（2004）『留学生アドバイジング 学習・生活・心理をいかに支援するか』（ナカニシヤ出版）, pp. 165–166

Tutoring Support in Kyoto iUP (I)

—Office Hour (Homeroom) Activities in the Preparatory Course

Yukinori Okada*#, Yuki Sasaki**

Abstract

This paper reports tutoring support to preparatory course students of Kyoto University International Undergraduate Program from AY 2019 to 2021, especially office hour (homeroom) activities conducted on a many-to-many basis. In AY 2020, due to the COVID-19 pandemic, online activities made it difficult for tutors to cooperate. A survey conducted with students pointed out things that needed to be improved. The difficulty of cooperation caused them. A tutor also claimed that the tutors could have worked better together if they had interacted with each other beforehand. Therefore, the authors established the following PDCA cycle in AY 2021. (1) tutors' social gathering before the start of activities, (2) meeting after every office hour to decide the next theme, and (3) preparation for the next office hour. As there were no calls for significant improvements, the cycle enabled the tutors to plan and organize the office hour activities proactively. The tutors' survey revealed educational effects on the tutors, such as they gained the ability to teach even common-sense things in an easy-to-understand manner.

Keywords: Kyoto iUP, Preparatory Course, Undergraduate International Students, Student Tutors, Schooling Support

* Kyoto University International Undergraduate Program Office, Institute for Liberal Arts and Sciences, Kyoto University.

** Kyoto University International Undergraduate Program Office, and Education Center for Japanese Language and Culture, Institute for Liberal Arts and Sciences, Kyoto University.

Corresponding author